

水上勉『瀋陽の半月』と『瀋陽の月』

——加筆改稿が意味するもの——

孫 陽

Abstract

Mizukami Tsutomu wrote the novel *The Moon of Shenyang* in the first person in 1985 when he was visiting Shenyang-Dalian of China. *The Moon of Shenyang* is the recalling and remorse of Mizukami's own needy youth. Studying from the angles of obvious addition, obvious recension and small addition which needs attention, this paper attempts to make a comparative analysis of "*A Half-Moon of Shenyang*" and "*The Moon of Shenyang*," so as to probe into how Mizukami rethought himself in literature.

キーワード…満州体験、再訪、「半月」、「月」、加筆改稿

はつめい

水上勉の小説『瀋陽の月』（一九八六年、新潮社刊）は、水上が

一貫して追及してきた「大連・奉天もの」(1)作品群の中心に位置する作品である。この小説の主要モチーフとテーマに関しては、別稿(2)において詳細な検討を行った。

『瀋陽の月』(単行本)の奥書を見ると、「新潮」昭和六十一年新年号掲載原稿に大幅に加筆改稿したとある。そのとき、『瀋陽の半月』から『瀋陽の月』に改められたのである。

水上のいう「大幅に加筆改稿」とは、一体、どの程度の、どのような改訂なのだろうか。また、二つの小説は、それぞれどのような構成と内容を持っているのだろうか。本稿は、両者を比較しながら、この問題について考えていく。

その方法として、『瀋陽の半月』と『瀋陽の月』とを厳密に比較し、「加筆改稿」の実態を明らかにしてみる。そして、その調査結果を整理・分析し、『瀋陽の月』へと練り上げていく水上の意図を解明してみようと思う。その結果、二つの小説は、それぞれテーマの異なる作品、ということになるかもしれない。もしそういう結論になるとすれば、一つの作品から別種のテーマをはらむ新たな作品を生み出す、という大胆な創作実験をしたことになる。これまで『瀋陽の月』に関する論評や研究はほとんど無かった。わずかに新潮文庫版(一九八九年)の「解説」(岩波剛執筆)があるくらいだ。『瀋陽の半月』と『瀋陽の月』との比較検討は、水上の後期の作品創造の本質を明らかにする最初の糸口となるだろう。

一 『瀋陽の月』と『瀋陽の半月』

1 両者の差異の概要

『瀋陽の半月』（以下『半月』と略称する）も『瀋陽の月』（以下『月』と略称する）も同じく16章で構成されている。各章の表示はアラビア数字のみで記されている。

まず、全体的に眺めると、全章すべてにおいて小さきまごまの「加筆改稿」がみられる。一行分ほどの改変、さらには三〜四分ほどの改変がある。驚くべきことに頁を越える大幅な改変も見られる。そういう分量の多い改変は、『半月』の文章を大きく削除しないで加筆した場合がほとんどである。『月』は、『半月』を土台として成立しているといつてよい。

ただし、初出雑誌の二〜三行分を削除して大量の増補加筆をしたところが三箇所みられる。この部分は、「改訂」箇所とみなして考察することにした。

三箇所の増補加筆は、第10章、第13章、第16章の末尾である。特に、第16章の末尾のそれは極めて大量であり、水上の創作意図を解明する重要なヒントを与えてくれる。また、後でくわしく述べるが、残留孤児、苦力、娼婦などに関する〈述懐的回想〉にも、小規模だが見落とすことのできない加筆がみられる。しかし、〈物語的再現部分〉(3) に関しては、第16章の末尾のみ加筆がみられる。作品を形成しようとする内的モチーフは、変化しなかったようだ。

以下、二つのテキストの校合作業の結果に基づいて、「新たに書き加えた部分（加筆）」、「書き直しをした部分（改訂）」、「微細な改変部分（改変）」の三つの観点から、加筆改稿の実態と意味を考える。

2 新たに書き加えた部分（加筆）

ここで言う新たに書き加えた部分（加筆）とは、単行本の三行分前後ぐらいの分量からはじまってそれ以上の複数頁に及ぶものまでである。次にそれらを列挙し、どのような内容の加筆なのか、簡単な説明を付けてみる。

1 五頁「じつは、それはまたのちにふれるとして、」（三行）
残留孤児

2

一三―一五頁「ぼくらのほかに、想像し得たか。」（二〇行）

移民船の人々、残留孤児

一六頁「移民船くゆきだったのだから。」（三行）

遊興地への関心

4

二八―二九頁「ぼくには不満にく態度でもあった。」（四行）

日本人の娼婦

二九頁「ぼくは日本からそれは殆どの」（三行）

同右

5

三七頁「ごみごみしたくつらさになるようだった。」(六行)

中国の庶民街

三八頁「四十八年前はく呆然と見つめているしかなかったにちが

いない」(三行)

遊女町

7

五七頁「父の反対―決意がかたまりつつあったように思う。」

(四行) 異国に住む決意

六二―六四頁「ぼくは、むかしはアジア号といったこの特急に似

た列車で瀋陽までいったんですが、く大連もやがては、

近代化がすすめば東北部唯一の国際都市として大発展す

るだろう、ということだった。」(二四行)

張さんとの会話(アジア号、夜汽車、東北部の昔と今)

8

七二頁「眼角がわずかにく櫛をつかっていた。」(三行)

肥田と戸田。戸田の若はげ

10

九一―九三頁「いまから思うと、く二畳の空間くらしに、馴れて

いった。」(二四行)

満州の仕事は予定行動

11

九七頁「えらそうなことはいえない。く一人だ。」

自分のために生きた

一〇五―一〇九頁「「和平さん」く確保しながら。」(五三行)

残留孤児、苦力

一一〇頁「昨夜ぼくからも気づいていたのだが、く訪れるのだから。」(四行)

札幌市観光団

13

一二四頁「この人の顔く出てくる。」(四行)

若狭の萬吉の爺

一三一―一三二頁「宋さんは、流暢な日本語で、く萬吉の御爺

さまとごつちやになって宋さんは追いかけてくる。」

(二五行) 宋さんのことば

15

一四一頁「に和風くあつたぐらいだろう」(四行)

妓楼

16

一五五頁「屋根も窓もみな昔のままなのだ。く昔の間取りにちが

いなかろう。」(四行) 妓楼「きりん」

一五五頁「ああこつだ。くで、ぼくは」(三行) 妓楼「きりん」

一五五―一五九頁「この「きりん」くになりました……」(五二行)

日本遊女町「きりん」「娼婦はつ枝」

一六二頁「ぼくが一しよにく四十年輩の女がいる。」(四行)

苦力の長屋、わきの売店

一六五―一六六頁「「お父さんはく」くいったものだ」(二〇行)

馮さん

一六八―一六九頁「四十八年の歲月く広場である。」(五行) 苦力

一六九―一七〇頁「三棟のく長かった。」(一行) 苦力

一七〇―一七六頁「出発の日はく四十八年目にのぞいたのだっ

た。」（八九行）

苦力、月

右に列挙したものと見ると、三、四行ほどの加筆が十六箇所、十行以上から八十九行までの大量の加筆箇所が九箇所である。量的に注目されるのは、二つの章の末に大きな加筆を行っていること、いくつかの章にまたがって共通する話題（「残留孤児」、「苦力」、「娼婦」）への加筆があることである。後者では、特に、残留孤児関係での加筆に特徴が認められる。

以下、第10章末と第13章末の加筆部分及び残留孤児に関する加筆部分を整理・検討する。

ア 第10章末の加筆

第10章の後半は、「ぼく」の仕事を回想している。苦力監督見習として、身近に知った苦力たちの姿が描写される。回想は苦力の身態りに及び、家庭における姿も紹介する。苦力の汚れ仕事とそれを監督する「ぼく」ら。こうした仕事に就くとは思ってもしなかった「ぼく」は、この仕事にまわした肥田を恨みつつも、次第に諦めの気持ちになって来た、というところまでが、『半月』のテキストである。

仕事内容の紹介↓仕事への不満↓諦め

という流れと押えることができる。『月』は、その先に、長文の加

筆がある。その内容は、もともと十九歳の「ぼく」には一種の諦観があったのだと振り返り、禅寺にいたものの自由な俗生活を望んで寺を脱出したが、その後の展開は思うようにゆかず、不満を感じていた。しかし、次第にあきらめ、現状に馴れるようになっていく。

禅寺を離脱↓俗生活への不満↓次第に馴れ

という流れが新たに加筆されている。

このように見ると、『半月』のテキストに記された内容とほぼ同じような性質のことながら、すなわち「ぼく」という人間が、いかに現状に順応しやすい性格だったのかということ、『月』で加筆したのである。むしろ、「ぼく」の諦観を強調しようとしたのではないだろうか。同趣旨のことを、材料を変えて繰り返した形であり、筆の向く方向は、「ぼく」の内心であることは間違いない。

イ 第13章末の加筆

この章末には、長文の加筆（回とする）がある。この回は、その少し前に記される三行分ほどの加筆（回とする）も視野に入れて考える必要がある。

この章は、「ぼく」が、昔の社員寮だった友信ビルが昔と変らぬ姿で残っていることに驚き、現在の住人・宋先立さんに会う場面である。『月』ではこの間に回「ぼく」は感激のあまり、色々

な昔のことを口走って、後で恥ずかしく思ったとあるが、宋さんも、それにつられて、自分の半生を語る。その昔、満拓公社に勤めていたこと、日本人から「シヨールハイ」とよばれていたことなど。それが呼び水となって、「ぼく」は、奉天時代に親しかった小孩・柯雪泰のこと（彼の父親も苦力であった。）を想い出す。やがて「ぼく」らは、宋さん宅を辞去。別れぎわに、宋さんは、次のように言う。

ここはあなたの家だった。そして、そのあとわたしも住んでいる家だ」（『半月』五四頁、『月』一三〇頁）

同じ家に住めば、同時同居でなくても、他人ではないのだ、というようなことである。（このあと、『月』には図の加筆がある。）

懐かしい建物を発見しての興奮（具体的な発言の描写は少ない）が、宋さんの昔話を誘い、それが「ぼく」の知っていた小孩を引き出すような働きをしている。しかし、回想の方向へ進むものとする叙述と、別れぎわの宋さんのことばとが、からみ合うことなく、このときの「事実」と昔の「回想」が、並列的に記されて、『半月』のこの章はとじられるのである。

これに対して『月』は、図の部分に三行ほどの加筆、図の部分（すなわちこの章の末）に長文の加筆がある。図の加筆は宋さんの容貌に対する「ぼく」の印象である。「ぼく」は、出会った人を、自分の知っている誰彼と重ねて見る傾向がある。ここでは、若狭

の萬吉爺さんである。この図の加筆が、章末の図の加筆にも絡んでくる。

図の加筆は、昔のことからに関することではない。小孩に関することでもない。

宋さんは、流暢な日本語で、ぼくに、あなたと自分は、赤の他人ではない。ひとつの家で住んだ仲間だといってくれましたね（『月』一三二頁）

別れ際の宋さんのことばを「ぼく」はしみじみと思い返しているのである。『半月』のこの章の末尾の繰り返しであり、それに対する「ぼく」の心情描写である。『半月』が、客観的な叙述と回想的な叙述を並記して止めているのに対し、『月』は宋さんのことばを反芻し全体の流れを統一的に主情的にとらえ直したのである。

注意すべきは、宋さんのことばでありながら、故郷の萬吉爺さんのことばでもあるかのように変化していることである。

キサマは、キサマで、わしはわしだが、この家に住んだめずらしい仲間だ、友人だ、キサマ（『月』一三二頁）

宋さんのことばの意味を「家はこの世の仮の住い」「たまたま宿りを同じくするものは仲間だ」（4）といいかえてみると、「ぼく」の感じとったものは、伝統的な思想ということが出来る。そしてこのとらえ方は中国・日本という枠を超えたものとして出てくる

のであり、さらに萬吉爺さんは「ぼく」のふるさとを象徴すると考えれば、本来自分ももっていたはずの深い境地に気づいたのだ、という章の結び方になっているのである。

ウ 残留孤児の姿

次に同一素材で複数の章にまたがる加筆について取り上げる。残留孤児に関する加筆である。三箇所ある。

〈その一〉第一章四〜五頁

六十七歳の「ぼく」は、残留孤児が実父母を求めぬニュースを見て、実父母が自分の年齢と同じであることに気づいて、他人事と思えない気持ちになる。家族にも打ち明けていない、自分だけの四十八年前の体験を思い出す。そして、その時代のことを確かめたいと思いはじめた。ここまでが『半月』のテキストである。

『月』は、このたびの中国訪問の飛行機で残留孤児たちの帰国組と乗り合わせたことを加筆している。

じつは、こんどの旅の飛行機上でも、ほぼ満員に近い乗客の中に、第何次かの遼寧省を中心の日本人孤児たちの帰国組とぼくは偶然乗りあわせるのだが、それはまたのちにふれるとして、（五頁）

『半月』は、自分の過去を思い出したただだが、『月』は、現実

の体験が重なるのである。

〈その二〉第二章 一三〜一五頁

「ぼく」が昔に乗った「はるびん丸」の乗客たちの思い出である。全体が長文の加筆になっている。『半月』にはない。十九歳のときに見たさまざまな人たちの姿を紹介し、この移民たちが実はのちの孤児たちの実父母になったのであろうと回想している。過去を再現する中で、過去の課題は現在も解決されていない状態であることを示している。

〈その三〉第十一章一〇五〜一〇九頁

苦力の仕事の光景を描写する。豚を運ぶ仕事を描写し、豚の泣き声が哀れをさそう。悲惨な仕事ぶりが描写される。ここまでが『半月』。

加筆部分は、六十七歳の「ぼく」の現実にもどって、張さんとのお話場面である。今回、中国に来る飛行機の中で孤児たちの帰国組と一緒になったこと、孤児たちの生まれたのが、「ぼく」が奉天で暮らした頃と重なること。「ぼく」は中国人をいじめたが、中国人は孤児たちに愛情を持ってくれたことなどを張さんに話す。こうした話を通して、「ぼく」の中国人に対する責任の問題を取り上げている。自分の責任を改めて問い直すような加筆である。ただ、この問題について張さんは、あなたのせいではない、時代の問題だったとやさしく応じている。

残留孤児に関する記述は、ほとんど加筆部分である。

『半月』には冒頭に、四十八年前のことを想い起すことになったきっかけとしてニュースのことが取り上げられているが、その後はまったく言及なしである。『月』はこの話題を具体的に展開し深めたのである。第1章では、残留孤児のことが、「ぼく」の人生と深く関わるものと考えられた。第2章では、移民した人々が、日本人孤児の親となったことを加えている。第11章での加筆は、「ぼく」が中国人苦力を苦しめる立場にいたことの懺悔と、中国の人々は日本人孤児にやさしくしてくれたということへの感謝である。

以上の三つの加筆箇所ア、イ、ウをあらためて振り返ってみよう。

『半月』における第10章では、十九歳の「ぼく」が遇った苦力たち及び彼らの苛酷な仕事の様子を述べて、「ぼく」は恨みとあきらめを述べている。この奉天における過去を述べるだけなのが『半月』の形である。これに対し、『月』の加筆部分は、「ぼく」がもともとどんな人間だったのかを思い出し、補強したものである。第13章の加筆は、まず、宋さんを日本の故郷若狭の萬吉爺さんと似ていると思ったことであり、それは親近感の表現である。その宋さんのことは「ぼく」にぐっと迫る。宋さんの言葉を言いかえるならば、ごくわずかな期間でもこの住まい（建物）は以前と変わらず存在し、ここに住んだことがある人々は、みな繋がっているのだ。宋さんと「ぼく」はそういう関係である。少し大

胆な言い方をすれば、中国と日本の繋がり、友好関係にも考えのばそうとしていられるかもしれない。また、故郷若狭の人達を思い出したことから考えれば、六十七歳になった「ぼく」が「落葉帰根」ということ、すなわち、人間は本来の帰属するところにもどるのだという思想を思い返しているのではなからうか。

また、残留孤児についても、老齡の「ぼく」が人生を振り返って、日本と中国の問題であると同時に一個人に関わる問題であると、さまざまな思考を巡らしたものと考えられる。

このようにみていると、『半月』から『月』への変化は、小説としての統一、完成への進展と評価することができよう。

なお、第16章の末、すなわち、『月』の末尾には、とりわけ大量の増補加筆がある。この部分は、作品全体が、どのようなものとして出来ているのを考える重要部分と考えられる。よって、この部分については、第二節で検討することにした。

3 書き直しをした部分（改訂）

書き直しをした部分（改訂）というのは、『半月』にあった文を少し削除して、『月』の中にあらたに加筆した箇所である。これから、その箇所をあげて、簡単な要約を付しておく。

6

②二四頁「ぼくだけかもしれない。――喜びはなかったように思う。」をカットして

四六一―四八頁「ぼくも収入の多いのに越したことはなかった。『思いはかっていたのである。』 赴任希望地の選択、細かく

渡満する人々は、少しでも収入の多いところへ行きたいと辺境を希望する傾向にあったが、

ぼくだけかもしれない。希望地を大連・奉天としたのは。

結局奉天にきまつても、黒河組のような喜びはなかったように思う。（『半月』二四頁）

を削除している。他の人々とは異なる希望を出して叶えられても、なぜ「喜びはなかった」のか、『半月』ではわからない。『月』は右の削除部分全体を書き改めたと行ってよい。単行本二頁半ほどの分量である。改訂で記されているのは、「ぼく」が奉天に決まるまでの裏事情（当初は辺地を希望していたのだが、「ぼく」が移民関係の役所勤務だったこともあり、係官が、将来の本社勤めをおわせて奉天を勧めた）が明かされ、決定してしまうと、辺境組から「ぼく」は、仲間はずれのような感じになったのだという。

7

⑥二八頁「つけ足した衣を馴れて、」をカットして、
五八―六一頁「思えばよくやっばり他人の運命だったのだろうか」

昔の人々に懐かしく

そうだ、ぼくは、あれから、いろんなことをして生きてきてしまった。が、翫のように必死に命がけで孤独だった生をその後味わったか。つけ足した衣の厚さがいつしか皮膚となり、ぜいたくな生活に馴れて、

『半月』の傍線部が削除されて、加筆されているのは、

イ 半年も経たぬうちの発病と帰国。

ロ 徴兵検査が丙種だったこと。

ハ 上京して出版社勤務。

ニ 召集されたが、内地にいて敗戦。

ホ 満州引揚船の着く舞鶴を傍観する分教場での助教となる。

ヘ 昔の仲間の消息を尋ねるきもちは薄かった。

ト その昔の移民船の仲間の意気軒昂さ。

チ 都合のいい立ちまわりで生きてきた。

というようなことがらである。「いろんなことをしていきってきた」という具体的な述べ直したものとみることができる。

16

①一五九―一六〇頁改訂「楊柳のよごれたく急いだ。」

中国の結婚式

『月』における大きな改訂は、右の三つの箇所である。③は希望地の選択に関する裏事情と決定後の人間模様ということの改訂である。④は十九歳の「ぼく」の帰国後の生き方を満州のあり方を問い直しながら反省している。⑤は「ぼく」が、張和平さんたちに案内されて、柳町の旧遊廓跡にやってきて、

(1) 昔のままに建物が残っていることに驚き絶句する。
(2) と、あたりに爆竹の音がして、結婚式だと張さんが教えてくれる。

(3) 「ぼく」たちは、貧民街の結婚式を見物する。

というのが『半月』である。『月』の改訂箇所は、(2)の部分だが、(1)と(2)の間に大きな加筆(単行本の三頁半ほど)がある。これとあわせて読むべきであろう。すなわち、『月』は、

(ア) 昔のままに建物が残っていることに驚き絶句する。

(イ) かつての日本遊女町が建物のみ残っていること。

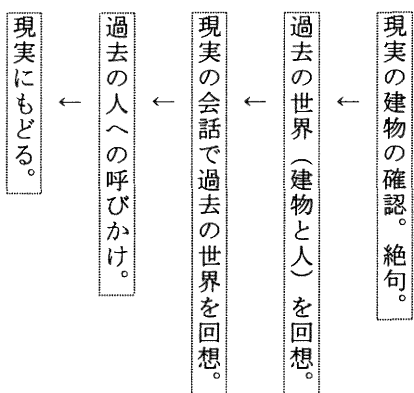
張さんとの会話(旧「きりん」を確認したこと、氣立てのいい娼婦のこと、抱え主が荷物道具で管理していたことなど)。

浦野はつ枝への内心での呼びかけ。

(ウ) 煙硝花火のような音がして、張さんがあれば結婚式で、音は爆竹だと教えてくれる。

(エ) 結婚式の新郎新婦、祝福する人々の様子。

となっている。『半月』の方は、結婚式の話が唐突に始まるが、『月』は、柳町に至って特に「きりん」の建物との再会によって、昔を思い出して、昔の人がすでにいなくなっていることで、「ここに日本遊女町が健在だった証しもないのである。」と無常感を漂わせながら、追憶にふけっているところに、爆竹の音がする「ぼく」は最初は「うわのそら」で聞き、続く音で現実にもどるのであった。



というのが『月』で、「ぼく」の気持ちだが、現実と過去を往還するさまが、自然な流れとして描かれている。これに対し、『半月』は、

- ・ 現実の建物の確認。絶句。
- ・ 現実の結婚式。

が並列的に描かれているのである。

さらに言えば、『半月』の（2）がはじまる直前（すなわち（1）のおわり）の表現は、「ぼく」が、

……空がひろくなってゆく露地の一角に眼をやった。

とある。かつての妓楼「きりん」を確認したのち、視線を転じると、むこうの方で結婚式がはじまるのである。「露地の一角」は結婚式の行われるところ、ということになる。

ところが、『月』では、

……露地の一角に眼をやったのだ。

と末尾を変え、（イ）の加筆部分になる。視線の先に見えるのは、「この「きりん」につらなって、ならば四角な建物」であり、すなわち「みな遊女屋跡だった」と続くのである。加筆改訂による「ぼく」の内心の動きが、現実の視線でとらえられた外界の建物と重なるような描かれ方になっていると言えよう。

◎の改訂は中国の結婚式の場面を細かく描写した。その後の加筆した部分を一緒に考えれば、意図がわかるだろう。

世帯道具が肝要である。ほうろうびきなら、長持ちさせれば生まれる子の洗濯盤にもなるだろう。大事な世帯道具だ。部屋いっぱい世帯道具に埋まって、小さびしげだった浦野はつ枝の顔がうかんで消えた。（傍線が加筆部分）『月』一六一頁）

以上の文章から分かることは、中国の結婚式の場面を改訂した目的は、「新婦は片手にほうろうびきの洗面器をひとつ抱え、」ということに注目しているという点である。新婦の洗面器とはつ枝の世帯道具は、「結婚」ということを介して繋がるような関係にある。はつ枝の場合は、結婚の実現がほとんど不可能なあきらめの下での（ある意味では残酷な。豊富であることが一層効果的）世帯道具であり、中国の新婚の場合はわずかな世帯道具であっても将来の希望に満ちたものとしてという対照が表現されているのである。

4 微細な改変部分（改変）

『瀋陽の月』を『瀋陽の半月』と比較すると、かなり大きな加筆改訂を行っていることがわかると同時に、微細な箇所の変更も目につく。この一見微妙な改変で、とりたてて意味を考える必要がなさそうに箇所にも、注目すべきものがあるようだ。たとえば、『半月』では「ぼく」の中国再訪の旅が「六泊七日の予定」とあ

ったのが、『月』では「五泊六日の予定」と変えられている。この日数変更と連動するのだろうか、大連の南山賓館での宿泊は、『半月』は「二泊」なのに、『月』は「一泊」である。数字の違いは、初出の「新潮」誌が誤植したためでないことは、それぞれにつじつまがあっていることから分かる。(実際の旅程がどうだったのかを穿鑿するのは、さしあたり必要はないだろう。)

このような微細な字句の改変ないし削除は、「てにをは」ももちろんのことながら、一文一文の文末表現にも及んでいる。特に文末の表現のうちに時制に関わるものは、一見したところでは、瑣末な改訂のように見えるのだが、ある傾向があるようにも感じられる。たとえば、

『半月』では、「街の様子だつて変つてはずだ。」とあるのを、

『月』では、「街の様子だつて変つてはらう。」と変えている。

『半月』では「確信的な推測」の表現だったのを、『月』では普通の「推測」にしているのである。このような文末の表現は、この小説の主人公であり語り手でもある六十七歳の「ぼく」が、若き日の体験や、つい最近の体験としての旅をどのような視点から捉えているのか、あるいはどのような心情で捉えているのかを意味していると考えられる。

右のような関心に基づいて、具体例を拾い上げて、おおよその傾向を見ることにした。本来ならば、『半月』と『月』のテキスト

間での改変・削除箇所だけでなく、作品全体の文末表現をあわせて見なければならぬのであるが、本稿では、それぞれの作品に表現された傾向が、どのような特徴をもっているのかを見定めることが目的であるから、異なる箇所を検討するだけでも有効だと判断したのである。

具体例を拾い出してみたところ、全部で二六九箇所であった。

これらは、「現在形」で止めているものを、「過去形」にしてみたり、単なる「過去形」が、「思い入れ」を付加するような表現に変えられていたりなどの違いを認めることができる。しかし、つねに一定の方向で、すなわち『半月』から『月』へと一律の改訂がなされているわけではなく、ある加筆傾向が『半月』↓『月』に認められるとしても、逆に、削除の方向が『半月』↓『月』に認められたりもする。しかし、そのようなこまごまとした状況を通してでも、ある傾向を見いだそうというのが、本項のねらいである。

さて、抽出した例を全体的に見渡した上で、結果として、五つの表現類型をたててみた。それぞれについて、具体例を二つずつ挙げて、私なりの理解を簡潔に記すことにし、『半月』と『月』それぞれの表現の分布はあとで一覧の表にする。

① 「……だった」「……のだった」とするもの。

例、「五泊しかない大連だ。」——「五泊しかない大連だつた。」

「徐行を命じたのだった。」——「徐行を命じた。」

付加された表現は、過去の出来事を、情感的に回想する表現と
考えられる。

㊦ 「…ものだ」とするもの。

例、「二、三杯よそつて呑んだものだ。」——「二、三杯よそつ
て呑んだ。」

「呑み屋で、まにあわせていた。」——「呑み屋で、まにあわ
せていたものだ。」

付加された表現は、過去の反復的習慣的行為を、懐旧の情を交え
て表現していると考えられる。

㊧ 「……と思う」「……と思った」とするもの。

例、「募集されたと思う。」——「募集された。」
「歩いていた罰だ。」——「歩いていた罰だ、と思った。」

付加された表現は、過去の出来事を、事柄そのものを提示するだ
けでは完結せず、それに個人的な感情記憶を交えて表現すること
で安定させる働きが考えられる。

㊨ 「……していた」「……ていた」とするもの。

例、「思ったりしていた。」——「思ったりした。」
「白状を強いられた。」——「白状を強いられていた。」

付加された表現は、㊦と関連するが、過去の行為を経過的進行的

に表現していると考えられる。

㊩ 現在形にするもの。

例、「と微笑する。」——「と微笑した。」

「語尾のひびきに感じとれた。」——「語尾のひびきに感じ
とれる。」

過去の出来事を描写する時に、過去形で一律に表現するのではな
く、現在形も適宜交えて表現するのは、歴史的現在と言えるだろ
う。この例は、その例である。しかし、併せて、現在形は、臨
場感を与えようとの意図を考えてもよい。

次に、それぞれについての、『半月』と『月』の分布表を示す。

表

	㊦	㊧	㊨	㊩	㊪
	66	11	11	9	25
	21	7	2	2	45
					「瀋陽の半月」
					「瀋陽の月」

さて、この表をみながら、それぞれの作品の特徴・傾向をまとめるならば、まず、㊸については、特に差異がない。過去の出来事に関して、その状況を経過の相で振り返ることに違いはない。

しかし、㊸をあわせて考えるなら、『月』の方が、そのような表現を削る傾向にあると言えよう。また㊸は、㊸のような削除方針が顕著だと考えられる。この部分は、出来事・行動について、「ぼく」の関わりを頭わに示すか否かということであり、『半月』は「ぼく」の介在を積極的に表現しようとする傾向があるのに対し、『月』は、ことさらにそのだけを記すことで表現を完結させようという傾向にあることが分かる。

表示でもっとも分かりやすく対照的なのは、㊸と㊸である。㊸の結果は、『月』の方が、過去をより情感的に回想する表現にしているということであり、㊸の結果は、『半月』の方が、より臨場感を狙った表現になっているということである。これは、言い換えるなら、『半月』の方はより物語的であり、『月』の方は、より内省的または自己批評的な傾向にあるということである。

二 「半月」と「月」

ここまで、『瀋陽の半月』と『瀋陽の月』の校合結果を踏まえて、初出時の作品の世界と改稿され単行本化された作品の世界のそれぞれの特徴を検討して来た。本論の最後に、雑誌初出本文と単行本とで最も大きな違いと考えられる、第16章末尾の問題を取り上

げる。まず、両作品の構成・展開を比較対照してみることから始めよう。

①この旅の帰国予定の日が迫る。

①王さんと周さんの案内で、柳町と北市場へ。

①昔は行ったことのなかった北市場を見たあと

①柳町に至り、「きりん」の建物がそのまま残っていることに驚く。

はつ枝の部屋も。

②はつ枝の思い出。

①(中国の質素な)結婚式に遭遇。

①昔のままの北市場貨物駅を発見。

①貨物駅事務長の馮家弟との会話。

②馮さんの亡父のこと。小孩、豚、馬などのこと。

ここまでが、『半月』である。『半月』は、昔と変わらぬ(と思える)旧地を前に佇立する所でおわる。

③日本に帰る日。

③肥田、戸波、松野の見送りがあり、

③「のぞみ」に乗る。

②その後、私は故郷で療養。

②会社との関係も途絶える。

② 瀋陽の四人の消息不明。

① 四八年前の故地再訪の感想。

① 今回最も心に残ったのは、大連から瀋陽への列車からみた「月」。

② 四八年前、日本帰国の「のぞみ」の夜行列車からは、「月」
見えず。

① 昔は隠れていたものが、今現れたのだ。

以上は『月』の加筆部分である。『月』は、ふたたび「物語」をはじめている。物語上で釜山行き「のぞみ」号に乗った「ぼく」は、いつの間にか、（飛行機で）帰国の途につく六十七歳の「ぼく」になっている。時空の合一か、時空の超越か。

「ぼく」は、北市場貨物駅の事務長、馮さんであった。いろいろ昔のことを話すのだが、その殆どは、「ぼく」の期待する反応が得られない。今年亡くなったという父親がその昔、苦力だったという娘の馮さんにしてそうなのであった。四十八年の時の経過が思い知らされるような会話が続く。最後に「ぼく」は、馮さんに御礼を言つて、倉庫の高床にのぼつて、古い家並みを遠望した。

見える。柳町の楼跡が見える。ぼくは、陽をさえぎるものがない倉庫の切妻屋根の下に佇立して、旧日本人街を眺めつづけた。昔の家はそのままだが、住む人は変わっているのだった。ところどころに干物のゆれる小窓が、ペチカの煙突に区

切られて額縁のようにまばゆい空の下にしずんでいる。〔半月〕六七頁）

これが、『半月』の最後の場面である。（傍線は筆者）この小説が最後に到達した世界は、「住み家」は不変だが、「住む人」は無常という世界である。「ぼく」は、ただただ、昔と変わらぬ風景を眺め続けるだけである。小説の時間はここでおしまい。それ以外にはなにもない情況が写し出されておわるのである。

これに、強いて解釈を加えるなら、『半月』の旅は、自分の心の中に秘めていた「暦」を尋ねてやって来たのであったが、いくつかの旧地を確認したのちにたどりついた北市場貨物駅周辺で、発見したものは、かわらぬ建物だけだった。「暦」と表現されるものを、「昔のぼくの姿」と言い換えることができるなら、昔そこに住んでいた人、すなわち「ぼく」はすでにいなくなっていたのである（あたり前のことだが）。旧地に立てば、昔の自分がよみがえるかと期待していたとすれば、結局叶えられなかった。旅で求めようとしたものは、結局発見できなかった、というのが『半月』の結び方である。『半月』は、「ぼく」を突き放した形で終わっている

と読みたい。これに対し『月』は、さまざまな加筆改訂を施して小説を終わらせている。馮さんとの会話でも、単行本八頁分の範囲で、一頁分ほどの加筆が二箇所、二、三行ほどの加筆が三四箇所という具合である。加筆の内容は、「ぼく」の過去の仕事内容及び苦力たち

の姿および仕事場に関することだが、もっとも大事な加筆は、昔「ぼく」が監督見習としていじめた可能性のある苦力の娘の馮さんにむかって、謝罪している場面である。

それが、周さんの通訳で、どのように、馮さんにつたわったのかもわからない。顔を伏せて、ぼくは頭を少しさげている気がする。そのぼくを、涼しげな眼で見つめる馮さんについてたものだ。(『月』一六六頁)

『半月』の場合は、昔のことを尋ねては、ことごとく現在は変わってしまったのだと思われられる会話なのだが、『月』の方は、「ぼく」の中の主情的な風景がくり返し表わされ、過去を振り返る旅であると同時に、謝罪の旅でもあったのだと気付かされる。そして『半月』のおわりの描写が出てくるのだが、『月』では、先の引用の傍線部分がカットされていることに注目される。「ぼく」は、倉庫の高床から旧貧民長屋や柳町の楼跡を眺め続けるのだが、「住み家」と「住む人」に関わる感慨の表現は削除されてしまふ。そのかわり、『月』は、そのあとに六頁ほどの増補がある。十九歳の「ぼく」の強制帰国の日の様子、帰国後の療養のこと、今回の再訪の旅の感想である。

まず、時間を遊らせて、帰国の日が再現される。奉天駅での戸波の励ましのことばなどに送られて「ぼく」は釜山終着の特急「ぞみ」に乗って、帰国の途についたのである。この小説は、帰国

後の療養生活と勤務先の国際運輸とのつながりを回想し、友人との連絡が途絶えてしまったことを記して休止する。会社や友人に対する特別な感慨を表すことばはない。「事実」をそのまま記して終わっているかのようなのである。しかし、列車が出た時の描写に「ぼく」の思いが込められているようだ。

「がんばれよおッ」

と戸波がさげんで手をふってくれていた。ほかのふたりも何かいつていたが、風に散ってよく聞こえなかった。列車が出ると、送り人たちはいつせいにオーバーの襟に首をうめて片手をふった。あの鼠いろの雲のひろがった空の下で、屋根のないホームがいやに長く野面にのびていた瀋陽駅の別れが、灰いろの雪の中でいまもなすびいろにもやって臉にある。

(『月』一七五頁)

一月の寒空の吹きさらしのプラットホームの別れである。「いやに長く野面にのびて」いるのは実景でもあっただろうが、離れたい心情が投影されていると読める。「別れ」が「なすび色に」「もやる」のも沈鬱な感情の象徴的表現と言えるのだろう。

『月』は最末尾に短い感想を記しておわる。

五十年近く経ってしまうと、ほとんどの記憶は失せて、茫漠として自然だろう。だが、人はその古い暦のなかに残

る一つ二つの光景を、鮮明に抱いて死ぬのかもしれない。このたびの大連、瀋陽再訪で、忘れていたことをいくらか思いおこしつつ歩いたが、あの大連から瀋陽へ向う夜行列車を、追いかけるように、窓にうかんできた月が、台風禍で疎林となつた野っ原の裸木の枝にひっかかっていたのを、あれから思いだしてばかりいる。四十八年前、ぼくが乗った「のぞみ」が本溪湖あたりで夜をむかえ、凍った雪原を走っていた夜空もかすかにうかぶのだけれど、あの夜かくれてみえなかった月が、四十八年目にのぞいたのだった。

この小説全体に書かれていたことを承けてまとめようとしていることは確かだが、まず、注意すべきことは、右の文章には、「過去」に対する謝罪は記されていない。また、娼婦たちも含め知人すべて音信不通どころか生死不明であるわけだが、既にこの世には存在しないかもしれない人々の魂を鎮めようとの思いも表現されていないことである。

四十八年後に旧地を訪問はしたものの、そして昔のことを思い出し、再現してみたり、話したりしてはみたものの、結局、その昔の「ぼく」の姿に新たな光を当てることはできなかったのである。「思い出」以上にはならなかったということである。

しかし、ただ一つ「過去」と「現在」を貫くものとして、「ぼく」が新たに意識したのは、「月」であった。

ここで、あらためて、この作品における「月」の意味を振り返

り、末尾のあり方を検討してみよう。

（その一）

「月」に関する描写は、第7章にある。第16章末尾で振り返られることになる「半月」である。傍線部は『月』段階の加筆。

茶褐色の畑だけがのびる地平線に鼠いろの林がみえだして、その先の空に半月がうかぶのを見た。地平は台風禍の傷痕がなまなましく残る荒れた平原だけれど、澄んだ空なのだった。わずかないわし雲が波だっているだけで、広大な地平の地明りをうけて白くうかびあがる月はいれかわる林の高低で梢にかかったり、はなれたりして列車を追ってくる。（『月』六五頁、『半月』二九頁）

「荒れた平原」だが「澄んだ空」は、車窓からながめた台風一過の実景のようだが、「ぼく」の心象と重ねられていると読めるだろうか。四十八年前の荒涼とした日々（傷痕）と現在の澄んだ心である。加筆部分を知ることによって「半月と平原」「半月と傷痕」という対比の意図を認めることができるだろう。また、月と列車の関係を、月が見え隠れしながら「追ってくる」と描写しているのは、広い大地ならではの光景であるが、列車に乗っている「ぼく」を動態そのままに月も動きながら見守っているということだろう。

〈その二〉

第8章では「月」が加筆される。傍線部が加筆された箇所である。

遼陽近くでは空も澄んで半月が見えたのに、どんより重たい鼠いろの空に月は見えなかった。しかし、眼がなれてくると、前方にうす明りが見えてきて、何本かの煙突が立っている。……今瀋陽は工業都市といわれている。その心臓部である。工場群のはるか向うの空のうす明りは、地平線の映えなのか、月明りかわからない。どこをさがしても月は出ていないのに。(『月』七〇頁)

瀋陽のホテル遼寧大廈の部屋に落ちついて、明日の旧地再訪を控えて、現在の瀋陽を一望している。工業都市の実景であろうが、「月」へのこだわりが加筆となっている。見えないといいながら、鼠いろの世界の向うのうす明りを「月明り」ではないかと思ってしまうようだ。過去にこだわる現実の自分を、見えないところから照らしてくれる存在が「月」ということになるだろう。

〈その三〉

『瀋陽の月』の最後の部分に大幅な増補があることは既に検討したが、あらためて「月」の増補をみる。

四十八年前、ぼくが乗った「のぞみ」が本溪湖あたりで夜をむかえ、凍った雪原を走っていた夜空もかすかにうかぶのぞいだった。(『月』一六七頁)

『瀋陽の月』の最後に、「あの夜かくれて見えなかった月が、四十八年目ののぞいだった。」とある。四十八年前の「ぼく」には、見えなかったが、四十八年後の現在、月が、はっきり見えたという。むかしはかくれていたというのは、「ぼく」は見ることができなかったが、月は今と変わらず照らしてくれていたのだということである。

言い換えれば、月を見ることができるようになったのは、その後いろいろなことを経験したことによる「ぼく」の心の変化によってであるということである。『瀋陽の月』は簡単にまとめると二つの時間が設定されている。十九歳の「ぼく」の時間と六十七歳の「ぼく」の時間との二つである。最後に二つの時間を結ぶものが「月」ではなかるうか。

時間空間がさまざまに変化し、この世に存在するもの(「ぼく」もさまざまに変化する(した)もの、「月」は永遠不変の存在として、この小説の最終末に至って認識されたと書かれているのである(5)。

なお、書名も注目すべきだと考えられる。即ち、『半月』が『月』

に変わったことである。「半月」は作中でも出てくる月であるからまずは問題はなさそうで、初出の題名が『半月』とあるのも自然だが、『月』になると、作中の「半月」は改変されぬまま、題名が変わっている。「月」が満月を指すとは必ずしも言えないが、「半月」が中途の段階を指していることにはなると考えられる。そう考えるならば、作家が「新潮」に掲載したときに、未完成の状態という意識があつて、『半月』という題名にしたのではなからうか。大幅な加筆改稿を予定しながら『半月』を発表したのではないかと考えるのである。(6)

おわりに

以上、本稿においては、『瀋陽の半月』と『瀋陽の月』のテクストの比較を通して、作中の語り主体「ぼく」のさまざまな体験およびその回想が、文学的によびのように変化し、深まっていたのかを検討した。本稿を閉じるにあたって、「ぼく」と作家・水上勉との関係について触れておく必要があるだろう。

水上は、晩年になって、何を考えて生きていたのかを、かなり直接的に語る作品を出すようになった。水上は、作品を書きながら自問自答していたのではないだろうか。

水上が「わが六道の闇夜」がどういう小説であるのかを解説した部分がある。「わが六道の闇夜」は水上の自伝小説で、「なるべく自制しているが、嘘と記憶違い」(7)も書くことは避けられな

いと言う。ここで水上が本当に書きたかったことは、「私という人間が、どういう育ち方をして、今日のようなひねくれた心の持ち主になったのか」(8)ということではないだろうか。水上のことはをふまえて、本稿で取り上げた作品にもどると、『半月』と『月』も水上自身の満州体験および中国再訪体験に基づいて書かれた小説である。『月』における、加筆改稿の部分は『半月』に続いて、方向が変わらないが、深く考えて書かれていることであると思われる。「ぼく」がどういう人間だったのかと深刻に考え問われたのではないだろうか。したがって、『月』は大連・瀋陽の再訪に基づいて書かれた小説というが、実際に大連・瀋陽の再訪に止まらず、「ぼく」自分の再考を目標とした小説と言えるだろう。相対的に言って過去を述べることに主眼のある『半月』から、「ぼく」が人間とは何かという問題にまで掘り下げて言及している『月』への変化には、自省性の重視を指摘することができる。

しかし、それでもなお、「ぼく」はすなわち水上勉その人なりというには、さらなる検討が必要であろう。

「ぼく」には、中国人に対して抱いた親しい感情があるとともに、異国で出会った優しい娼婦に対する特別な感情、中国人の苦力に対する自分の所業への悔恨などがある。それらは、この再訪の旅で出会った人々へ懺悔的に回想されたり、内心の述懐として表出されたり、往時の会話を再現して物語的に記されたりする。

「ぼく」は、等身大の水上勉であると、読まれることを計算しているのかもしれない。実像とすれすれの形の虚像であるかもしれない

ないのである。(文字化、文学化されたものは、本質的に虚像だという議論は、この場合無用である。)そのような操作の一端―これは、ほころびの類ではないだろう―は、本稿中でも指摘した、中国再訪問の日程記述の変更からも推測することができる。もし、そうなら、水上文学にとつての「実」と「虚」とは何か、水上文学における「虚」と「実」に本質的な差違があるのか、ということとを、あらためて大きな課題として設定しなければなるまい。しかし、本稿においては、そこまで入りこむことは、出来なかつた。この課題の検討は「大連・奉天もの」諸作品を、全体として検討することを通して可能になるだろうと考えている。

『瀋陽の月』に対する現在の評価としては、「水上勉が、青年時の満州の体験を回想しながら、晩年になって自らの心を問う」ことを装った小説だということになる。

〈注〉

- (1) 「大連・奉天もの」とは、仮に名付けたのである。発表誌・発表年月等は省略するが、「瀋陽にて」(一)、「瀋陽にて」(二)、「奉天北市場」―「小孩」―黄色の写真―「瀋陽の空」―「大連港駅」―「大連逢坂町」―「小孩のこと」―「大連にて」―「旧満州奉天駅―娼婦の駅」―「丹波周山」―「山陰本線 和知駅―丹波の満月」―「青春放浪」―「比良の満月」などの紀行文・エッセイがある。
- (2) 「水上勉『瀋陽の月』の語るもの」(仮題)という論考を予定している。
- (3) 「水上勉『瀋陽の月』の語るもの」という論文で分けた。
- ① 〈現在〉「ぼく」六十七歳(昭和六十年・一九八五)の「現在」を翌年の「ぼく」が回想している。
- ② 〈述懐的回想〉「ぼく」十九歳のことを昭和六十一年(一九八六)の

小説の「地の文」として回想、および〈現在〉次元の中国人案内者と会話中での回想。②③は中国人との会話での回想である。②①は「地の文」の回想である。

③ 〈物語的再現〉「ぼく」十九歳(昭和十三年・一九三八)の「往時」を、描写を交えて再現する回想。

(4) 「一樹の陰に宿りあひ一河の流れを汲む云々」は、日本中世の文藝に類出する思想の一つ。聖徳太子信仰に関係する『説法明眼論』などに記されている。

(5) 最終到達点の在り方が、必ずしも一致するわけではないが、世の無常のさまを描写し、執筆主体の内面史を述べ、最終的に内心を自問するという構成は『方丈記』を想起させる。

(6) あるいは、『半月』の段階で「ぼく」がどういう人間かまだわからなく、『月』の段階でわかったのかもしれない。また、月の意味について禅の関係を考慮する必要があるだろう。今後の課題としたい。

(7) 水上勉、『水上勉全集・十二巻』、「わが六道の闇夜」、中央公論社、一九六七、二九三頁。

(8) 前掲書。

主指導教員(錦仁教授)、副指導教員(佐々木充教授・先田進教授)